

多度地区小中一貫校整備事業 第2回開校準備委員会 会議概要

開催日時 令和3年10月23日(土) 14:00~15:30

開催場所 多度まちづくり拠点施設 第4教室

出席委員 22名中 21名

1. 開会

2. 議事

(1) 経過報告

地域連携部会より <報告者:西山 広 委員>

教育指導部会より <報告者:伊藤綾子委員>

(2) 多度地区小中一貫校の校種について

① 資料説明

② グループワーク

③ 意見交流

【Aグループ】

特別な支援を必要とする子どもたちにとっては、大きな環境の変化がないため力を発揮できやすいという点で、義務教育学校は良いのではないか。

現場の先生がやりやすい形であれば、義務教育学校という選択も良い。先生の負担を軽減するためには、人的配置の充実が必要である。

新しい学校では、校舎や仕組みなど、環境が一新されるので、どの地区の子どもにとってもアウェイ感がなくなるという点で、期待できる。

学校は、地域の中心である。地域の方にとって、誰もが学校に行きやすい仕組みを整えてほしい。

【Bグループ】

小中一貫校で二人の校長がいると、相談しながら進めていける良さと、やりにくさの両面がある。一つの施設に小・中学生が一緒にいることによる教育の可能性は広がっていく。その中で、一人の校長が9年間を見据えて教育活動を推進できる義務教育学校はメリットを感じる。

4小学校の統合を伴う中で、義務教育学校として開校したときにどんなことが起こるのか、子どもにも教員にも不安があるだろう。教員にとっては、9年間の一体的な教育活動に様々な可能性を感じる中で、新しい活動を進めるには準備する時間も必要となるため、人的配置の充実が必要となる。

【Cグループ】

4-3-2の学年段階の区切りとは、9年間の中で子どもの発達段階に応じて、「基礎学力をしっかりとつける時期」「思春期の指導を連携して行う時期」「社会に出る準備をする時期」の3段階に区切るものであると共通理解できた。

義務教育学校では、校内の体制としては、校長が1人であることは指示系統が明確となる。地域としても、校長が1人だと相談する際など明確だが、5地区を1人で把握するのは大変ではないか。

新しい学校では、基礎学力をしっかりとつけてほしい。中1ギャップを感じないようにしてほしい。校則等のすり合わせをしておくことで不安が軽減できる。

義務教育学校のデメリットについて教えてほしい。

④ 今後の進め方

<委員長>

義務教育学校については、分からないことがまだまだ多いが、議論を尽くして準備を進めていくしかない。次回の第3回開校準備委員会では、義務教育学校についての理解をさらに深めていくために、義務教育学校を経験されている方を招いて、実際の話を知りたいということでしょうか。よろしければ事務局と相談の上、準備を進めていきたい。

(3) 子どもによる提案書(案)について

(4) その他

3. その他